

鏡を見て自分の顔を描くのは、最初から欠かしたことがないんです。

しかし、おかしいでしょう。それをしたからといって、絵が上手くなるわけでもない。

「無意識というものこそ、死と同じように人間の中で一番、文化的に変化しない唯一の場所だと私は理解しています。このことは私にとっては見物人の中にある無意識を自覚させる必要があります。その自覚のさせかたに面白いと私が思っているものに宗教画があります。とくにマンダラは、自覚に到る道順を描いてあり、順次時間をかけ、修業してゆけば、自覚に到着する仕組みになっています。この場合、自覚とは仏教的には〈さとり〉ということです。私は、そんな絵を描きたいわけです。勿論、私なりの流儀でやりたいのです」これは『髭の軌跡|桜井孝身小文集』（権歌書房 092-731-3504）のなかの一節である。

桜井孝身は無意識を変化しない絶対的な領域と捉えているようだが、無意識界ほど私たちが日々生活のなかで、揺さぶられているところはないのではないか。表現され、作られたものに、意識的なものや無意識的なものの時代のコードを読み解くことが、私たちの次の時代への新しいなにものかを産みだす手だてとなることがある。桜井のいう季語〈無意識〉とは〈さとり〉に繋がるものであって、それは彼が描いても描いても登れもしない、掘り下げもできず、現実という地平線にがんじがらめにしばられて、私たちの心のなかに転がるビンボン玉のようなものにちがいない。彼の画面に現われる天使は、その玉をつかまえようと飛びまわっているのだ。〈バラダイスシリーズ〉という絵を描き続けるこの画家の深層になにが潜んでいるのか、のぞいてみたいと思った。

九州派の人たちはコワイ、これが記者のもつ印象であった。なにか一言いったら、太陽のもとで百発、殴られそうなラジカルなイメージをもっていた。殴られこそはしなかったが、「九州派の桜井さんというイメージ……」「絵を描く前に座禅をすとか……」などブツブツいいだしたら、機関銃のごとく、グサグサと心を刺す言葉がいきおいよく発射されていくのであった。

▼みんないろいろといいよるから、あんた九州派のことを正式にしゃべれよ、なんていわれるけれども、ぼくは「いいじゃないか。おれが九州派の大將だったっていうわけでも何でもないじゃないか、それぞれがみんな大符といえればいいじゃないか。そして、大將といえる話題のある人のほうがおもしろいじゃないか」というんです。

そうすると今度は、九州派を語ってはならない人が語っているじゃないか、おまえ、慣りを感じないのかというんだけど、
「そうねえ、そんなに九州派っておカ本になるのか」って、ぼくは聞きたいわけ（笑）「なるんだったら、しゃべって、おまえが儲けたらどうか」と。

ピカソが天才というのは、本人は決していわないと思うの。人がただいかに過ぎないわけであって、天才と呼ばれたから、天才と名前を変えるなんて、アホなことはないだろうといたい。九州派の桜井だったら、それも良うございます。そのへんの乞食の、ヒゲを一伸ばしたおっちゃんと話してみたいという通行人がおって、いま話しよるかもわからないのね。それもまた、いいんじゃないですか、っていいたいわけ。

ぼくはよく一流品よりも、四流品でけっこうだということです。それで人が必要とするから、友だちが広がっていくわけですね。その広げ方のほうに興味がある。絵をつくるっていうことはそうあるべきだとは、あえていわないけれども、そうあったらいいなと思うわけ。

—アメリカに行かれてからは、タブロー一本で……。

▼いや、最初の海外での発表は、実は箱で展覧会をやっているんです。それと、目の玉ね。九州派の友だちから、マネキンの義眼なんかもらって、ああいうのを使ったのを出したんです。箱の中から何回も扉が出てきて、びっくりするようなのを……。だから、まず立体でいったわけです。

アメリカへ行ったといっても、ぼくはニューヨークじゃないんですよ。サンフランシスコです。すでにそこが、ぼくは意識はしてないけれども、結果的に違うんですね。篠原ぎゅうちゃんたちはネオダダというふうに名乗るとるだけに、はっきりした造形的なものでいったと思うんです。ぼくが連中と違うのは、田舎者を誇りにしているんです。

外国へ行くと、みんな東京から出てきたと。「それはわかっている。成田も羽田も東京といえば、それは東京だろう。その前はどこから来たか」とおれはいうわけ。そういう意味では、ぼくは田舎者であることを……。さっき一流と四流だったら、四流を取るといったのは、そこなんです。ぼくがサンフランシスコを選んだというのは、詩人のギンズバーグやピートニクとか、ヒッピーとか、そういう関係に興味を持っておったんです。

二十年前、ヒッピーの元祖が始まったときですね。しょせん、ポッアアートが資本主義の一つのリアリズムだとすれば、その前ですからね。サンフランシスコがああいう詩人からヒッピー運動まで起こるといえるのは、はっきり言えば、ジーンズに帰っていくわけですね、運動として。

—ヒッピーとか LSD とかは、日常からの脱却的なイメージがあったわけですが、それらを実際に体験して、四流というか、人の輪がひろがって、新しい絵への展開があったということですか。

▼ぼくが田舎を大番にする。そして四流品でいいんだというのは、逆に言えば、これはものすごいコンプレックスですよ、隠しようがないものですね。それを味といっても嘘になるし、本当といっても嘘になる。しよせん、そこにある田舎者のコンプレックスを丸裸に見せようということが、ぼくの逆説的な生き方なんです。

そういう意味で唯一、岡本太郎のすごさというのは、極端というところがおもしろいわけ。極端にいけば、また極端に戻ってくるだけの話で、何ていうことないですけども、おもしろいのはそこですね。

けつきよくぼくの都合のいい生き方として、一応何でも反対してみるというのが、ぼくの主義なんです。だから、われわれが何かいうとすぐ、「ああいえば、こういうでしょう」というわけ。それが実は禅の文句にあるんですよ。仏様を信じながら、仏様をけったくれというのが、禅でしょう。だから、まさにああいえばこういう小憎らしさですね。もう許せないぐらいの……。

そういうところから、ぼくの出発はいつも曲がって……。最初からやらねば良かったのと思うことが多過ぎるわけ（笑）。すんなり最初からニューヨークに行って、頑張っとならば、もう少しどうにかなっとなつたんじゃないか。

桜井さん、おまえバカだな。アメリカのサンフランシスコなんて、変なところに行くのはおかしいじゃないか。そんな我を張らんで、アホなことを言わんで、ニューヨークに行けば良かったのに、と九州派の連中からやかましく言われた。「いや、しかし、ここが」って理由をつけるわけ。太平洋を囲む運動をやるなんて、『西日本新聞』に書いたこともありますよ。そういう大きいことばっかり書くわけです。

結果的に、最初は九州派的な仕事で、本をセメントでつくってみたり、いろいろつくってみたりしよったです。それがちょうど済んだころ、アメリカ人の女と恋愛したら、LSDを飲まんと、本当の恋はわからんというわけ。それは初期のだから、よく実験されてない薬なんです。

それを飲まんと、ほれた女は、おまえ、そんなにこわいのかというわけ。そこはやっぱり強がり、で、「いや、そんなつまらん麻薬みたいなもので、おれは恋の本質を知ろうとは思わん。おれはもう少しきちっと自分が信じられる」といったわけ。

そこに都合のいいことに、オチオサムが来た。あいつはとんちんかんぶんな男で、珍しいものだったら、何でもやろうという男ですからね。それで、オチに「そんなの飲むか」って聞いたら、「桜井さん、それはええばい。やろう、やろう」っていうわけ。

それで、飲むと見えるかという、見えるのね。もう麻薬と思えば、けっこうです。幻想ですから。日本では麻薬禁止法なんかがあるから、幻覚というのが正當に理解されていないんですね。だから、そういうのがなかなかわからない。説明できないです。

この幻覚の世界は、医者管理のもとに人間が絶対に享受していい経験なんです。もし月に行く自由があるなら、それ以上に……。もう一つの世界ですよ、幻覚の世界という

のは。だから宗教の起こったところは、全部幻覚剤があるんです。人間の想像力というのは、たいへんなものですね。

そういうことのおもしろみで、ぼくの絵はこういう絵に変わったんです。だから、LSDを飲んだときから始まったわけ。そのとき、ぼくが向こうの大学生から見せてもらったのが、じゅうたんがあつて、神様が股を広げて寝ていて、まさに牛がセックスしようとする曼荼羅みたいな、宗教的なあれだったわけです

—東京都美術館の六〇年代展に出品されていた絵は、たいへん印象的でした。個展の作品を見てから行ったもので、違うウマサを感じました。アスファルトや釘などを使った画面からは、その当時の既成の絵画に対峙する意気込みも感じられました。

▼そうですね。この間も菊畑先生が笑いながら、おまえの昔の作品は、都の美術館のやつなんか、えらいうまかったといいよったけれども、当時はぼくが九州派では絵がうまいことになっておったんです。腕力も強かったし、文章も書きよったし。『西日本新聞』に勤めとったですからね。人が飲みたければ、おれがおごるくらいのカネは持つとったし……。

—殴り合いの時代だったというふうに聞いておりますが。

▼ぼくは、大した男じゃないけれども、実は相撲の選手だったですから、実力的にも負けてなかったです。アマチュアだから、プロとはうんと差があるから、そう強くはないですよ。ただ、田舎相撲とすればね。おれも力があるぞとって、負けちゃおらんのです。けっこう、鼻息が荒かった。

あと、ぼくは昔から言っているんだけど、コピーというのは、たいへんりっぱなことだと思っています。言葉自体がコピーでしょう。自分のものを出すのに、ひじょうに苦労しているけれども、自分のものがないことがよくわかっているわけです。

そのとき模写するとか、模写するのも面倒臭いときは、鏡を見て自分の顔を描くのは、最初から欠かしたことがないんです。しかし、そんなことをいうのも、おかしいでしょう。それをしたからといって、絵がうまくなるわけでもない。ただ暇つぶしに、それをやったに過ぎないんですね

—桜井さんの絵は、感情がわき出てきているという感じがしますね。

▼そういつていただくと、ひじょうにありがたい。そういわれると、これでもう少しカネ儲けしてみようかなんていう気になるんだけど（笑）、正直いって、自分じゃわからないですよ。人のことはわかってる。

—絵としての手続きというんですか、それがやっぱりあるんですね。

▼ぼくはこの画廊春秋の浅川先生といろいろ語ったんだけど、そういう意味では、ぼくはほかの絵描きと違って、画商とかコレクターを、絵描きと同格と見るんですですから、逆にいったら、こういいたいわけ。ぼくは浅川の目が見たいから、ここでやるわけですよ。彼が見た絵が永遠に残っていくわけ。ぼくの絵じゃなくて、彼の目が残っていく。ですから、ぼくはぼくがないわけですよ。そこでは。

—夏は日本にお帰りになって、あとはバリで制作していらっしゃるわけですが、帰ってくるたびに、日本が変わっている感じはありますか。

▼それは「ある」といったら、嘘ですね。ということは、論理的にも成り立たないんですね。工藤哲巳なら、うまくいえるだろうと思うけれども、しかし、ぼくはそれをいいたくないんですね。だから、さっきからいっているように、結局は四流……。ずっと思いをつめて、やるのが一流ですね。だから、一流はグメなんです。

お釈迦さんは、ぼくにいわせれば、あれは四流です。なぜか知っていますか。あんないことなら、もう少し追求して……。まだしゃべる段階じゃないでしょう、悟りなんていうのは。あの人は四流品だから、悟りを早くいいたかったんですね（笑）。やっぱり、四流品が世の中を救うんですよ。本当に勇気があって、悟った人なんか、悟ったままだから、いうチャンスを逸してしまうんですよ。

だから、聖者は全部自骨になって、げてものだけが生き延びていくわけです。やっぱり田舎者を誇りにせにゃ、しょうがないわけですよ。博多の田舎者がそっくり返って、いばっている。気遣いかパカかと、こうなるでしょう。だから、ぼくは気遣いじゃないからバカのほうを選びましょう、四流品でけっこうだということになるわけです。